

看護学生の職場選択と精神科病院に対する就労意識

田邊 要 補・藤田 勇・中川 京 美・田沼佳代子

Workplace selections of nursing students and their employment awareness about psychiatric hospitals

Yosuke TANABE・Isamu FUJITA・Kyomi NAKAGAWA・Kayoko TANUMA

高崎健康福祉大学紀要 第17号 別刷

2018年3月

看護学生の職場選択と精神科病院に対する就労意識

田邊 要補・藤田 勇¹⁾・中川 京美・田沼佳代子

(受理日 2017年9月26日, 受稿日 2017年12月21日)

Workplace selections of nursing students and their employment awareness about psychiatric hospitals

Yosuke TANABE・Isamu FUJITA¹⁾・Kyomi NAKAGAWA・Kayoko TANUMA

(Received Sept. 26, 2017, Accepted Dec. 21, 2017)

I. はじめに

大学生が社会人として就職を決定するということは、人生のなかでも最も大きなイベントの一つである。文部科学省の平成28年度学校基本調査¹⁾によると、卒業者559,678人のうち418,163人(74.7%)が就職をしている。文部科学省が毎年行っている学校基本調査によると、看護学生は専門的・技術的職業従事者の分類に入り、就職先もある程度限定される。看護学生の中には大学院への進学、保健師そして養護教諭を目指す者もいるが、多くの看護学生は病院へと就職をしている。

看護学生は進路決定の際、就職説明会や病院訪問、親や友人などから能動的に情報収集しており、継続教育体制および教育環境の充実、希望に合致した所在地、所得福利厚生などを重要視しているとの報告^{2,3)}がある。就職に関する研究では、2年生と3年生を対象とした進路選択と進路支援のニーズに関する研究⁴⁾や1年生

と4年生を対象とした職業社会化に関する研究⁵⁾、また、卒業生を対象とした就職先選択要因に関する研究⁶⁾などがある。しかし、職場選択に関しての研究は4年生に焦点を当てたものが多く^{2,3,7,8)}、各学年でどのような差があるのか等を調べた研究は少ない。

また、看護学の領域は従来からよく言われている基礎看護学、成人看護学、老年看護学、地域看護学などにとどまらず、国際看護学、災害看護学、感染看護など多くの領域がある。このように多くの領域があるなかで、精神看護学に興味を持っている学生は少なくない⁹⁾。そして、将来的に経験してみたい診療科として精神科をあげる学生⁹⁾や、精神看護学臨地実習後は精神科看護に魅力を感じる学生も多くいる¹⁰⁾。しかし、看護学生が希望する病院形態としては総合病院を選択しており、診療科別でみると精神科を希望する割合は非常に低かったとの報告¹⁾がある。実際に精神科病院に就職する学生は少なく、看護学生は精神科病院で働くことに興味・関心はあるものの、いざ就職となると、精神科病院を職場の第一選択とすることは少ないのが

1) 北里大学保健衛生専門学院

現状である。

前述のように、精神科病院の職場選択について、第一選択としない理由に関して4年生に焦点を当てた研究⁹⁾が少しあるものの、全学年で調査した研究はない。さらに、どうして精神科病院で働いてみたいと思っているかを調査した研究もない。そこで、看護学生が精神科病院に対しての職場選択をどのように考え、学年別で意識に差があるか等を知ることは重要である。

II. 目的

今回の研究では、看護学生が職場選択を決定する時期はいつで、その理由は何か、また、精神科病院で働くことに関して、1年生から4年生の間で違いがあるのかを質問紙を用いた調査を行い、その実態を明らかにするとともに、精神看護学の授業に活かすことを目的とする。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

量的研究，横断的研究

2. データ収集期間

平成28年1月～平成28年4月

3. 調査対象者

A 大学 B 学部看護学科 1年生～4年生 365名

4. 調査項目

1) 質問紙の概要

調査票を用いて学年ごとに説明し、自記式にて行った。

調査票の内容は、卒業後の進路、学年・性別

等のプロフィール、①精神看護学に対する興味、②就労先として考えている病院形態、③就労先選択の基準、④就労先として考えている診療科、⑤就労を希望する病院形態や診療科を決定した時期、⑥就労先として考えていない診療科、⑦希望する就労先決定に対する講義の影響、⑧希望する就労先決定に対する誰かの影響、⑨希望する就労先決定に対する実習の影響、⑩診療科別の看護師としての質の差、⑪精神科看護師と他科の看護師の質の比較、⑫卒業後1年目からの精神科勤務、⑬卒業後1年目から精神科勤務をためらう理由、⑭他の診療科を経験してからの精神科勤務、の①～⑭について選択肢から選んでもらう。⑮精神科の患者さんや、精神科看護、または精神科病院（施設）のイメージについては自由記載してもらった。

2) データの収集方法

各学年共に研究者が担当する授業以外の授業終了後、研究責任者および研究分担者が教室に行き、以下のことを説明書および調査票を配布した後説明した。

(1) 研究の背景・目的と研究の方法

(2) 調査票について

(3) 研究の参加について

- ・自由参加である。
- ・説明を聞いてもらい、回収は翌日であり、参加者のみ提出する。研究に参加しなくても不利益をこうむることはない。まして、研究への参加の有無が学業成績や単位取得に影響を与えることはない。
- ・調査参加後でも、理由の如何を問わずあなたがやめたいと思った時は、いつでもやめることができる。
- ・同意は調査票の提出をもって、同意が得られたものとする。

- ・調査票は無記名式のため、提出後研究に対して拒否したとしても取り消すことはできない。

(4) 調査票の回収

- ・調査票は、研究の説明をした教室以外の場所に設置されたボックスに投函してもらった。
- ・回収ボックスは研究依頼の説明をした翌日の12時まで設置した。

5. 分析方法

1) 量的部分

①精神看護学に対する興味、②就労先として考えている病院形態、③就労先選択の基準、④就労先として考えている診療科、⑤就労を希望する病院形態や診療科を決定した時期、⑥就労先として考えていない診療科、⑦希望する就労先決定に対する講義の影響、⑧希望する就労先決定に対する誰かの影響、⑨希望する就労先決定に対する実習の影響、⑩診療科別の看護師としての質の差、⑪精神科看護師と他科の看護師の質の比較、⑫卒業後1年目からの精神科勤務、⑬卒業後1年目から精神科勤務をためらう理由、⑭他の診療科を経験してからの精神科勤務、の①～⑭について、各学年別に集計をした。

2) 質的部分

記述式の⑮精神科の患者さんや、精神科看護、または精神科病院（施設）のイメージについては、記述された内容をKH coder Ver.2.00fを使い、計量テキスト分析を行った。

6. 倫理的配慮および個人情報の保護

本研究は研究者が所属する機関の倫理委員会の承認を得て実施した。研究協力の申し出があった学生に対して、研究内容および研究参加

による利益・不利益を説明した。さらに、研究参加への拒否・中断の自由、参加の有無によって不利益を被らないこと、プライバシーの保護、匿名性、データは他の研究に利用しないことなどを書面をもって説明し、同意を得た。

調査票は「連結不可能匿名化」であり、無記名で回答してもらい、個人名を特定できないように集計した。データは、研究の目的以外には一切使用しない。インターネットに接続していないコンピューターを使用し、研究分担者がアンケート実施後よりデータベースに入力した。調査票は研究室の保管庫に保管し、常時鍵を掛けておく。研究終了後データベースはコンピューターから消去する。調査票も研究終了後、シュレッダー等にて裁断・破棄する。

IV. 結果

質問紙の配布数は365、回収数は335（有効回収率91.8%）であった。

①精神看護学に対する興味

「精神看護学に興味はありますか」の質問に対して、1年生は興味がある42名(42.0%)、興味がない12名(12.0%)、どちらでもない46名(46.0%)であった。2年生は興味がある23名(29.1%)、興味がない30名(38.0%)、どちらでもない26名(32.9%)であった。3年生は、興味がある36名(54.5%)、興味がない9名(13.6%)、どちらでもない21名(31.8%)であった。4年生は、興味がある34名(39.5%)、興味がない16名(18.6%)、どちらでもない36名(41.9%)であった(表1)。

②就労先として考えている病院形態

「あなたが就労先として考えている病院形態はどれですか」の質問に対し、1年生は総合病

院が41名(39.4%)で、次に未定が40名(38.5%)で、大学病院が13名(12.5%)の順であった。2年生は総合病院が48名(55.8%)で、次に未定が23名(26.7%)で、大学病院が8名(9.3%)の順であった。3年生は総合病院が41名(55.4%)で、次に大学病院と未定がそれぞれ14名(18.9%)の順であった。4年生は総合病院が47名(55.3%)で、次に大学病院が24名(28.2%)で、その他が9名(10.6%)の順であった。詳細については表2の通りである。

③就労先選択の基準

「あなたは何を基準に就労先を選びますか(複数回答は3個まで可能)」の質問に対し、1年生は職場の雰囲気(76名(25.6%))で次に場所・地域(57名(19.2%))で、自分のやりたいことができる・できそう(44名(14.8%))で、勤務体制(36名(12.1%))、給与(35名(11.8%))の順であった。2年生は、職場の雰囲気が43名(21.7%)で次に場所・地域(37名(18.7%))で、新人教育の充実(27名(13.6%))で、給与、休暇がそれぞれ22名(11.1%)の順であった。3年生は、職場の雰囲気が55名(25.6%)で次に場所・地域(40名(18.6%))で、新人教育の充実(35名(16.3%))の順であった。4年生は、職場の雰囲気が51名(22.6%)で次に場所・地域(44名(19.5%))で、新人教育の充実(28名(12.4%))の順であった。

④就労先として考えている診療科

「就労先として考えている診療科はどれですか(複数回答は3個まで可能)」の質問に対し、1年生の上位は小児科38名(21.0%)、産科26名(14.4%)、内科22名(12.2%)であった。

2年生の上位は、小児科31名(17.5%)、産科25名(14.1%)、内科24名(13.6%)であった。3年生の上位は、外科30名(20.7%)、内科26名

(17.9%)、救急(ICU含む)23名(15.9%)であった。4年生の上位は、外科38名(25.7%)、内科37名(25.0%)、救急(ICU含む)19名(12.8%)の順であった。

⑤就労を希望する病院形態や診療科を決定した時期

「就労を希望する病院形態や診療科を決定した(決定する)時期はいつ頃ですか」の質問に対し、1年生は未定38名(39.6%)が最も多く、大学3年次20名(20.8%)、大学入学前17名(17.7%)と続いた。2年生は大学3年次24名(31.2%)が最も多く、未定18名(23.4%)、大学2年次16名(20.8%)と続いた。3年生は大学3年次35名(53.0%)が最も多く、大学4年次21名(31.8%)と続いた。4年生は大学4年次57名(68.7%)が最も多く、大学3年次17名(20.5%)と続いた。詳細については表3の通りである。

⑥就労先として考えていない診療科

「今現在、就労先として考えていない診療科はどれですか(複数回答可)」の質問に対し、1年生の上位は手術室35名(19.2%)、救急26名(14.3%)、精神科23名(12.6%)であった。2年生の上位は、救急38名(21.1%)、精神科36名(20.0%)、手術室31名(17.2%)であった。3年生の上位は、精神科35名(18.7%)、小児科・産科・手術室がそれぞれ25名(13.4%)、救急22名(11.8%)であった。4年生の上位は、産科46名(20.8%)、精神科39名(17.6%)、小児科34名(15.4%)の順であった。

⑦希望する就労先決定に対する講義の影響

就労先を決定した人に対し、「希望する就職先の決定に対して講義の影響はありましたか」と質問したところ、1年生はかなり影響している1名(4.2%)、影響している8名(33.3%)、影響していない8名(33.3%)、全く影響していない

7名(29.2%)であった。2年生は、かなり影響している0名、影響している13名(56.5%)、影響していない9名(39.1%)、全く影響していない1名(4.3%)であった。3年生は、かなり影響している2名(5.0%)、影響している19名(47.5%)、影響していない15名(37.5%)、全く影響していない4名(10.0%)であった。4年生は、かなり影響している2名(2.4%)、影響している28名(34.1%)、影響していない31名(37.8%)、全く影響していない21名(25.6%)であった(表4)。

⑧希望する就労先決定に対する誰かの影響
就労先を決定した人に対し、「希望する就労先の決定に対して誰かの影響はありましたか(複数回答は3個まで可能)」と質問したところ、1年生は自分で決める20名(51.3%)、親13名(33.3%)であった。2年生は、自分で決める19名(63.3%)、親・大学の教員がそれぞれ4名(13.3%)であった。3年生は、自分で決める23名(36.5%)、親17名(27.0%)、大学の教員10名(15.9%)であった。4年生は、自分で決める53名(38.7%)、親29名(21.2%)、大学の教員26名(19.0%)の順であった(表5)。

⑨希望する就労先決定に対する実習の影響
2年生～4年生に対し、「希望する就労先の決定に対して実習の影響はありましたか」と質問したところ、2年生はかなり影響している7名(10.8%)、影響している38名(58.5%)、影響していない15名(23.1%)、全く影響していない5名(7.7%)であった。3年生は、かなり影響している27名(42.2%)、影響している29名(45.3%)、影響していない5名(7.8%)、全く影響していない3名(4.7%)であった。4年生は、かなり影響している19名(22.4%)、影響している39名(45.9%)、影響していない10名(11.8%)、全く

影響していない17名(20.0%)であった(表6)。

⑩診療科別の看護師としての質の差

「診療科別に看護師としての質に差があると思いますか」の質問に対して、1年生は大変思う10名(10.8%)、思う47名(50.5%)、思わない33名(35.5%)、全く思わない3名(3.2%)であった。2年生は大変思う8名(10.3%)、思う50名(64.1%)、思わない20名(25.6%)、全く思わない0名であった。3年生は大変思う9名(13.2%)、思う42名(61.8%)、思わない17名(25.0%)、全く思わない0名であった。4年生は大変思う13名(15.1%)、思う57名(66.3%)、思わない16名(18.6%)、全く思わない0名であった(表7)。

⑪精神科看護師と他科の看護師の質の比較

「精神科看護師の質は、他科の看護師と比較してどのように思いますか」の質問に対して、1年生はかなり高い3名(3.3%)、高い41名(45.6%)、変わらない46名(51.1%)、低い0名、かなり低い0名であった。2年生はかなり高い6名(7.8%)、高い21名(27.3%)、変わらない47名(61.0%)、低い3名(3.9%)、かなり低い0名であった。3年生はかなり高い0名、高い18名(26.9%)、変わらない37名(55.2%)、低い12名(17.9%)、かなり低い0名であった。4年生はかなり高い1名(1.2%)、高い22名(25.9%)、変わらない50名(58.8%)、低い11名(12.9%)、かなり低い1名(1.2%)であった(表8)。

⑫卒業後1年目からの精神科勤務

「卒業後1年目から精神科で働いてみたいと思いますか」の質問に対して、1年生は大変思う0名、思う9名(9.6%)、思わない74名(78.7%)、全く思わない11名(11.7%)であった。2年生は大変思う0名、思う3名(3.9%)、思わない60名(77.9%)、全く思わない14名(18.2%)で

あった。3年生は大変思う0名、思う6名(8.8%)、思わない47名(69.1%)、全く思わない15名(22.1%)であった。4年生は大変思う0名、思う6名(7.1%)、思わない60名(71.4%)、全く思わない18名(21.4%)であった。全体では、思う24名(7.4%)、思わない241名(74.6%)、全く思わない58名(18.0%)であった(表9)。

⑬卒業後1年目から精神科勤務をためらう理由

卒業後1年目から精神科で働いてみたいとは「思わない」または「全く思わない」と答えた人に対し、「精神科への就職をためらう理由は何ですか」と質問したところ、1年生は患者とのかわり方が難しい22名(25.6%)、新卒での不安19名(22.1%)、恐怖心18名(20.9%)が上位であった。2年生は患者とのかわり方が難しい23名(26.7%)、恐怖心18名(20.9%)、新卒での不安15名(17.4%)、知識・技術修得の遅延13名(15.1%)が上位であった。3年生は知識・技術修得の遅延31名(40.3%)、新卒での不安19名(24.7%)、患者とのかわり方が難しい10名(13.0%)が上位であった。4年生は患者とのかわり方が難しい28名(30.4%)、知識・技術修得の遅延23名(25.0%)、新卒での不安22名(23.9%)が上位であった。詳細については表10の通りである。

⑭他の診療科を経験してからの精神科勤務

卒業後1年目から精神科で働いてみたいと「思わない」または「全く思わない」と答えた人の中で、「他の診療科を経験してから、精神科で働いてみたいと思いますか」の質問に対して、1年生は大変思う1名(1.3%)、思う30名(39.0%)、思わない43名(55.8%)、全く思わない3名(3.9%)であった。2年生は大変思う1名(1.4%)、思う18名(25.4%)、思わない47名(66.2%)、全く

思わない5名(7.0%)であった。3年生は大変思う1名(1.6%)、思う29名(46.8%)、思わない31名(50.0%)、全く思わない1名(1.6%)であった。4年生は大変思う1名(1.3%)、思う25名(31.6%)、思わない47名(59.6%)、全く思わない6名(7.6%)であった(表11)。

⑮精神看護学に興味があると答えた人の中で卒業後1年目からの精神科勤務

「精神看護学に興味がある」と答えた135名の中で、「卒業後1年目から精神科で働いてみたいと思いますか」という問いに答えた人は130名であった。その内訳は次の通りである。1年生は、思う9名(23.1%)、思わない28名(71.8%)、全く思わない2名(5.1%)であった。2年生は、思う3名(14.3%)、思わない17名(81.0%)、全く思わない1名(4.8%)であった。3年生は、思う6名(16.7%)、思わない24名(66.7%)、全く思わない6名(16.7%)であった。4年生は、思う6名(17.6%)、思わない24名(70.7%)、全く思わない4名(11.8%)であった。全体では、思う24名(18.5%)、思わない93名(71.5%)、全く思わない13名(10.0%)であった(表12)。

⑯精神科病院(施設)のイメージについての自由記載

単語の出現頻度の上位は1年生では、イメージ8、暗い8、閉鎖5であった。2年生では、イメージ12、閉鎖9、暗い7、隔離5であった。3年生では閉鎖9、患者7、鍵6、明るい6、イメージ5であった。4年生では、閉鎖15、イメージ11、暗い8、多い8、病院8、明るい6であった。

単語の出現頻度については計量テキスト分析を行った。結果については、表13に示した。

表1 精神看護学に対する興味

n = 331

		1. ある	2. ない	3. どちらでもない	合計
1年生	人数	42	12	46	100
	割合	42.0%	12.0%	46.0%	100.0%
2年生	人数	23	30	26	79
	割合	29.1%	38.0%	32.9%	100.0%
3年生	人数	36	9	21	66
	割合	54.5%	13.6%	31.8%	100.0%
4年生	人数	34	16	36	86
	割合	39.5%	18.6%	41.9%	100.0%

表2 就労先として考えている病院形態

n = 349 (複数回答)

		1. 総合病院	2. 専門病院	3. 大学病院	4. 診療所	5. 未定・わからない	6. その他	合計
1年生	人数	41	4	13	2	40	4	104
	割合	39.4%	3.8%	12.5%	1.9%	38.5%	3.8%	100.0%
2年生	人数	48	4	8	2	23	1	86
	割合	55.8%	4.7%	9.3%	2.3%	26.7%	1.2%	100.0%
3年生	人数	41	5	14	0	14	0	74
	割合	55.4%	6.8%	18.9%	0.0%	18.9%	0.0%	100.0%
4年生	人数	47	4	24	0	1	9	85
	割合	55.3%	4.7%	28.2%	0.0%	1.2%	10.6%	100.0%

表3 就労を希望する病院形態や診療科を決定した時期

n = 322

		1. 大学入学前	2. 大学1年次	3. 大学2年次	4. 大学3年次	5. 大学4年次	6. 未定	7. その他	合計
1年生	人数	17	15	0	20	6	38	0	96
	割合	17.7%	15.6%	0.0%	20.8%	6.3%	39.6%	0.0%	100.0%
2年生	人数	5	4	16	24	10	18	0	77
	割合	6.5%	5.2%	20.8%	31.2%	13.0%	23.4%	0.0%	100.0%
3年生	人数	2	2	0	35	21	6	0	66
	割合	3.0%	3.0%	0.0%	53.0%	31.8%	9.1%	0.0%	100.0%
4年生	人数	3	1	3	17	57	1	1	83
	割合	3.6%	1.2%	3.6%	20.5%	68.7%	1.2%	1.2%	100.0%

表4 希望する就労先決定に対する講義の影響

n = 169

		1. かなり影響している	2. 影響している	3. 影響していない	4. 全く影響していない	合計
1年生	人数	1	8	8	7	24
	割合	4.2%	33.3%	33.3%	29.2%	100.0%
2年生	人数	0	13	9	1	23
	割合	0.0%	56.5%	39.1%	4.3%	100.0%
3年生	人数	2	19	15	4	40
	割合	5.0%	47.5%	37.5%	10.0%	100.0%
4年生	人数	2	28	31	21	82
	割合	2.4%	34.1%	37.8%	25.6%	100.0%

表5 希望する就労先決定に対する誰かの影響

n = 269 (複数回答)

		1. 自分で決める	2. 親	3. 兄弟姉妹	4. 同級生	5. 先輩	6. 大学の教員	7. 親戚の人	8. その他	合計
1年生	人数	20	13	2	0	0	2	1	1	39
	割合	51.3%	33.3%	5.1%	0.0%	0.0%	5.1%	2.6%	2.6%	100.0%
2年生	人数	19	4	0	1	0	4	1	1	30
	割合	63.3%	13.3%	0.0%	3.3%	0.0%	13.3%	3.3%	3.3%	100.0%
3年生	人数	23	17	1	5	2	10	2	3	63
	割合	36.5%	27.0%	1.6%	7.9%	3.2%	15.9%	3.2%	4.8%	100.0%
4年生	人数	53	29	1	12	8	26	4	4	137
	割合	38.7%	21.2%	0.7%	8.8%	5.8%	19.0%	2.9%	2.9%	100.0%

表6 希望する就労先決定に対する実習の影響

n = 214

		1. かなり影響している	2. 影響している	3. 影響していない	4. 全く影響していない	合計
2年生	人数	7	38	15	5	65
	割合	10.8%	58.5%	23.1%	7.7%	100.0%
3年生	人数	27	29	5	3	64
	割合	42.2%	45.3%	7.8%	4.7%	100.0%
4年生	人数	19	39	10	17	85
	割合	22.4%	45.9%	11.8%	20.0%	100.0%

表7 診療科別の看護師としての質の差

n = 325

		1. 大変思う	2. 思う	3. 思わない	4. 全く思わない	合計
1年生	人数	10	47	33	3	93
	割合	10.8%	50.5%	35.5%	3.2%	100.0%
2年生	人数	8	50	20	0	78
	割合	10.3%	64.1%	25.6%	0.0%	100.0%
3年生	人数	9	42	17	0	68
	割合	13.2%	61.8%	25.0%	0.0%	100.0%
4年生	人数	13	57	16	0	86
	割合	15.1%	66.3%	18.6%	0.0%	100.0%

表8 精神科看護師と他科の看護師の質の比較

n = 319

		1. かなり高い	2. 高い	3. 変わらない	4. 低い	5. かなり低い	合計
1年生	人数	3	41	46	0	0	90
	割合	3.3%	45.6%	51.1%	0.0%	0.0%	100.0%
2年生	人数	6	21	47	3	0	77
	割合	7.8%	27.3%	61.0%	3.9%	0.0%	100.0%
3年生	人数	0	18	37	12	0	67
	割合	0.0%	26.9%	55.2%	17.9%	0.0%	100.0%
4年生	人数	1	22	50	11	1	85
	割合	1.2%	25.9%	58.8%	12.9%	1.2%	100.0%

表9 卒業後1年目からの精神科勤務

n = 323

		1. 大変思う	2. 思う	3. 思わない	4. 全く思わない	合計
1年生	人数	0	9	74	11	94
	割合	0.0%	9.6%	78.7%	11.7%	100.0%
2年生	人数	0	3	60	14	77
	割合	0.0%	3.9%	77.9%	18.2%	100.0%
3年生	人数	0	6	47	15	68
	割合	0.0%	8.8%	69.1%	22.1%	100.0%
4年生	人数	0	6	60	18	84
	割合	0.0%	7.1%	71.4%	21.4%	100.0%
全体	人数	0	24	241	58	323
	割合	0.0%	7.4%	74.6%	18.0%	100.0%

表10 卒業後1年目から精神科勤務をためらう理由

n = 341 (複数回答)

		1. 知識・ 技術修得 の遅延	2. 恐怖心	3. 新卒で の不安	4. ストレ ス	5. 興味が ない	6. やりが いがなさ そう	7. 患者 との関わり が難しい	その他	合計
1年生	人数	9	18	19	5	8	0	22	5	86
	割合	10.5%	20.9%	22.1%	5.8%	9.3%	0.0%	25.6%	5.8%	100.0%
2年生	人数	13	18	15	3	11	0	23	3	86
	割合	15.1%	20.9%	17.4%	3.5%	12.8%	0.0%	26.7%	3.5%	100.0%
3年生	人数	31	4	19	2	6	1	10	4	77
	割合	40.3%	5.2%	24.7%	2.6%	7.8%	1.3%	13.0%	5.2%	100.0%
4年生	人数	23	2	22	4	9	1	28	3	92
	割合	25.0%	2.2%	23.9%	4.3%	9.8%	1.1%	30.4%	3.3%	100.0%

表11 他の診療科を経験してからの精神科勤務

n = 289

		1. 大変思う	2. 思う	3. 思わない	4. 全く思わない	合計
1年生	人数	1	30	43	3	77
	割合	1.3%	39.0%	55.8%	3.9%	100.0%
2年生	人数	1	18	47	5	71
	割合	1.4%	25.4%	66.2%	7.0%	100.0%
3年生	人数	1	29	31	1	62
	割合	1.6%	46.8%	50.0%	1.6%	100.0%
4年生	人数	1	25	47	6	79
	割合	1.3%	31.6%	59.6%	7.6%	100.0%

表12 精神看護学に興味があると答えた人の卒業後1年目からの精神科勤務

n = 130

		1. 大変思う	2. 思う	3. 思わない	4. 全く思わない	合計
1年生	人数	0	9	28	2	39
	割合	0.0%	23.1%	71.8%	5.1%	100.0%
2年生	人数	0	3	17	1	21
	割合	0.0%	14.3%	81.0%	4.8%	100.0%
3年生	人数	0	6	24	6	36
	割合	0.0%	16.7%	66.7%	16.7%	100.0%
4年生	人数	0	6	24	4	34
	割合	0.0%	17.6%	70.7%	11.8%	100.0%
全体	人数	0	24	93	13	130
	割合	0.0%	18.5%	71.5%	10.0%	100.0%

表13 精神科病院（施設）のイメージについての自由記載

1年生
<p>暗いイメージ 2 暗いイメージがある 2 イメージが暗い. 隔離などがあるイメージ. 冷たい感じ. 閉ざされたイメージ. 病室の種類がいろいろあったり特殊なイメージ.</p>
<p>暗い 2 暗いイメージ 2 暗いイメージがある 2 イメージが暗い 暗い. 閉鎖的.</p>
<p>閉鎖的 2 暗い. 閉鎖的. 白く. 閉鎖的. 閉鎖的というのをよく聞く.</p>
2年生
<p>暗いイメージ 2 閑静のしたイメージ. 少し暗いイメージ. 暗そう. 隔離しているイメージ. 閉ざされているイメージ. 冷たい. くらい. こわい-明るい. 温かい. やさしい. 自然 どちらのイメージもある. 活発的ではないイメージ. 暖かい自由な部分もありそうなイメージ. おだやかなイメージだった. 豊かな環境の中にあるイメージ. 自由な空間があるイメージ.</p>
<p>閉鎖的 2 閉鎖的. 暗い. 閉鎖的. 散歩する庭がある. 閉鎖的. へき地. 嚴重. 白い. 閉鎖的. 閉鎖されている. 閉鎖病棟に対して恐怖心がある. 隔離. 閉鎖.</p>
<p>暗いイメージ 2 少し暗いイメージ. 暗い. 静か 2 暗そう. 隔離しているイメージ. 閉鎖的. 暗い.</p>
<p>隔離されている. 隔離. 閉鎖. 隔離施設がある. 隔離室などがあってこわい. 暗そう. 隔離しているイメージ.</p>

3年生
<p>閉鎖的 3 閉鎖などがあり恐怖心がある。 閉鎖的。鍵がかけられた扉ばかり。 閉鎖的な面もありそう。 閉鎖空間もあるが明るい。 閉鎖的であるが、病状によって外出も可能であったりと柔軟。 閉鎖的。患者さんの利益よりも病院側（看護師側）の利益が優先されてしまっているイメージ。</p>
<p>病院というより、患者さんの生活の場であり、治療もおこなう療養所のようなイメージ。 患者さんによっては1人で出て行ってしまう方もいるため、施錠管理に注意しているというイメージ。 ただ患者さんの居場所を作るのではなく病気を早く治して社会参加できる場を提供する場所。 患者さんを守ることを大事にしている。 患者さんのことを考えている。 地域の中で患者も過ごす。 閉鎖的。患者さんの利益よりも病院側（看護師側）の利益が優先されてしまっているイメージ。</p>
<p>隔離病棟がある。部屋にすべて鍵がかかっている。作業療法を行う。 働くことで鍵を持っている優越感のようなものを感じたりする恐れがあると思う。 きれい。鍵がかかっている。工夫がされている。（精神科ならではの） 閉鎖的。鍵がかけられた扉ばかり。 檻、鍵管理。 鍵で管理されていて閉ざされている。</p>
<p>社会参加を目指している。怖いと思っていたが実際の現場は明るい。 思ったより明るい雰囲気。 閉鎖空間もあるが明るい。 昔より明るい。 想像よりも明るく開放的。 明るく普通病院と変わらない。</p>
<p>病院というより、患者さんの生活の場であり、治療もおこなう療養所のようなイメージ。 ホスピタリズムもあり、他の科と異なるイメージがある。 患者さんによっては1人で出て行ってしまいう方もいるため、施錠管理に注意しているというイメージ。 閉鎖的。患者さんの利益よりも病院側（看護師側）の利益が優先されてしまっているイメージ。 きれいで自然があるイメージ。</p>
4年生
<p>閉鎖的 3 閉鎖されている。 閉鎖的な感じがした。 においがある。閉鎖的。 閉鎖的。臭いがこもっている。 閉鎖的なイメージ。独特なおいがあるがそれが少し苦手。 閉鎖的。社会とのつながりが少ない。 閉鎖的。他の病院とは違う施設。 静かであるが、たまに大きな声がきこえる。閉鎖している。 閉鎖的である。地域との関わりが少ない。 閉鎖的なようで開放されている。（かぎとかすごいけど、プライバシー的には……） 閉鎖的な所と開放的な所が両方ある。 閉鎖的なイメージが強いけれど、実際に行ってみると明るいところだった。</p>

<p>暗いイメージ 2 全体的に少し暗いイメージ。 閉鎖的なイメージが強いけれど、実際に行ってみると明るいところだった。 隔離室など倫理的な配慮と安全への対応バランスが難しい。他の病院に比べネガティブなイメージが強い。 長期入院が多い。町とかから離れたところにあるイメージ。 数が多くない。近くにないイメージ。 古い体制の病院もあれば、新しいものを取り入れる病院もあり、病院によってムラがあるイメージ。 においが独特、患者さんが廊下に座ってる、怖いイメージ、暗い、男の看護師が多い。 閉鎖的なイメージ。独特なにおいあってそれが少し苦手。 安全な療養生活のため鍵がかかるドアが多く、少し閉ざされているイメージ。</p>
<p>暗い 2 全体的に少し暗いイメージ。 暗い、のんびりしている。 暗い、静かな場所にある。 明るさは、一般病院よりも暗そう。 病院によって環境が整っていたり、明るいふんいきがある所もあれば、施設内が暗く感じる所もある。 においが独特、患者さんが廊下に座ってる、怖いイメージ、暗い、男の看護師が多い。</p>
<p>新しく、きれいな所が多い。 男性の看護師が多い。 長期入院の方が多い、散歩など気分転換をはかる援助が多い（喫煙も時間を決めてOK）、生活援助（洗濯など）を行う。 においが独特、患者さんが廊下に座ってる、怖いイメージ、暗い、男の看護師が多い。 数が多くない。近くにないイメージ。（町とかから離れたところにあるイメージ） 長期入院が多い。 安全な療養生活のため鍵がかかるドアが多く、少し閉ざされているイメージ。</p>
<p>病院によって環境が整っていたり、明るいふんいきがある所もあれば、施設内が暗く感じる所もある。 古い体制の病院もあれば、新しいものを取り入れる病院もあり、病院によってムラがあるイメージ。 明るさは、一般病院よりも暗そう。 閉鎖的、他の病院とは違う施設。 他の病院と違いが大きい。地域とのつながりをもっている。 他の病院に比べネガティブなイメージが強い。</p>
<p>閉鎖的なイメージが強いけれど、実際に行ってみると明るいところだった。 病院によって環境が整っていたり、明るいふんいきがある所もあれば、施設内が暗く感じる所もある。 他の領域の病棟とあまり変わらない（明るい、清潔）。 明るい、急性期は怖い。 きれい、明るい、清潔。 明るさは、一般病院よりも暗そう。</p>

V. 考察

1. 看護学生が職場選択を決定する時期と理由について

看護学生が職場選択を決定する時期は、大学3・4年生が最も多いことが分かった。これは、

学習を進めるにあたり、今まで知らなかった知識を蓄積する中で、自分に最もふさわしいと思われる病院形態や診療科を決めていくからであると思われる。何故なら、1年生が考える就労先として考える病院形態は総合病院が39.4%と一番多いが、次に来るのは未定の38.5%である

こと、就労先として考える診療科についても、1年生・2年生は小児科・産科を希望する者が上位であるが、3年生・4年生は外科、内科、救急が上位に来ることからも言えるのではないかと考える。就労先として考える病院形態について考えると、総合病院が1年生では39.4%であったものが2年生では55.8%となるが、3年生・4年生では横ばいのままである。学年が進むにつれて未定が減少していくのは当然のことであるが、4年生になると大学病院の増加や進学や養護教諭などを含めた“その他”が増加してくるものと思われる。就労先として考える診療科について考えると、1年生・2年生が小児科・産科を希望する者が上位にくるのは、自分が実際に働いている姿をイメージして考えるというよりも看護ケアの対象として考えた時のイメージが先行しているのではないかと考える。様々な看護分野を詳細に学ぶにつれ、特定の分野に興味をもち、その分野に関連する診療科で働きたいと考える学生もいるかもしれないし、反対に、特定の分野に興味をもち深く学ぶが故に“現実”と直面し、その分野に関連する診療科から離れていく学生がいるのかもしれない。このように、自分が実際に働く姿を想像しながら職場選択を決定していくのではないかと考える。

職場選択を決定する理由としては、原ら³⁾の先行研究では継続教育体制が上位にあり、大塚ら²⁾の研究でも継続教育・環境の充実が1番であった。本調査においては、どの学年も職場の雰囲気は1番であった。Alzayyatら¹¹⁾の文献研究において、臨床教育は看護学生にとって最もストレスの多い経験であることは明らかであると述べている。Bartlettら¹²⁾は、ストレスの完全な原因は不明なままであるが、看護学校が独

特のストレス経験を増加させていると述べている。また、大塚ら²⁾の研究の中で、就職への不安の内容として“職場の人間関係”が上位にきている。これらのことから、継続教育の充実もさることながら、まず自分が安定して仕事に取り組めることを1番に選び、そのうえでの新人教育が充実している職場を選んだのではないかと考える。

就労先の決定に影響を与えた人に関しては、原ら³⁾の研究によると、親、友人、教員の順番であった。本調査においては、自分で決める、親、教員、同級生の順番である。“自分で決める”を除くと、原ら³⁾の調査と同じような傾向を示した。最終的には自分で決めるのであるが、人生のなかでも最も重要なイベントの一つであるので、親や教員の意見に耳を傾けながら、職場選択をしていくのではないかと考える。

就労先を決定する際の講義と実習の影響について、母数の多い4年生と比較すると、講義が影響していると答えた学生が36.5%であったのに対し、実習が影響していると答えた学生は68.3%であった。このことは、主体的に学ばなければならない実習という授業形態が影響していることと、実際に受け持たせていただくことが多い患者とのダイナミックな関わりが職場選択に大きく影響しているのではないかと考える。

2. 精神科病院で働くことに関して

卒業後1年目から精神科で働いてみたいと思うかについては、どの学年も「思う」と答えた学生は10%未満であり、学年間での大きな違いはなかった。卒業後1年目から精神科での就職をためらう理由としては、全体で見ると、患者とのかかわり方が難しい、知識・技術修得の

遅延、新卒での不安、恐怖心が上位にきていた。目立つところでは、1年生・2年生は恐怖心の割合が高く、3年生は知識・技術修得の遅延の割合が高かった。

患者とのかかわり方が難しいことについては、患者の精神状態が急に変わることが多いと感じていることや、外科や内科の患者と比べると関わり方が難しそうに感じている学生が多い結果ではないかと考える。小野ら¹⁴⁾は、精神看護は対人関係の技術を応用しながら、患者との距離を最適に保ちながらコミュニケーションしていく看護実践であると述べている。しかし、近年の若者と同様の傾向として、看護基礎教育の充実に関する報告書¹⁵⁾においても、看護学生のコミュニケーション能力不足が指摘されている。このように、学生自身が対人関係を構築するコミュニケーションを苦手とすることから、精神看護学に関心はあるが患者とのコミュニケーションを主とする精神科病棟の勤務を難しいと感じていることも理由の一つなのではないかと思われる。

1年生・2年生の恐怖心の割合が高いことについては、精神看護学実習等で精神に障がいのある方と長時間にわたって接した経験がないため、田邊ら¹³⁾の研究にもあるように、プラスのイメージよりもマイナスのイメージのほうが記憶に残りやすく、マイナスのイメージを持ったまま大学に入学してくるからと思われる。授業で精神症状を理解してもらうときには、体験談やDVDを活用するが、どちらも症状が激しく出ているときのことが中心になるため、マイナス的なイメージが残るのではないかと思われる。

3年生は知識・技術修得の遅延の割合が1番上位であった。看護技術の修得について、看護

基礎教育の充実に関する検討会¹⁵⁾では「学生の体験できる看護技術が臨地実習で限られており、身体侵襲を伴う看護技術に関しては無資格の学生が実施できる範囲が限られている」と報告している。このようなことから、学生の看護技術の体験不足が知識・技術の不足となり、就職への不安につながっている。そのため、就職については、看護技術を多く体験できる精神科病院以外の就職先を選択する理由の一つになっているのではないかと考える。

また、自由記載の精神科病院についてのイメージを見ると、明るい、きれいと答えている学生もいるが、多くの学生は暗い、閉鎖的、隔離などマイナスのイメージを抱いている。それは、これまでの歴史的な精神医療の流れの中で、精神疾患患者が収容されているそのこと自体が、患者を怖いと思わせているからではないかと考える。このことも、看護学生が精神科病院で働きたくないという思いにつながっていると思われる。

以上のようなことから、看護学生が精神科病院での就職をためらっているのではないかと考える。

3. 精神看護学に対する興味の有無と就職選択について

精神看護学に興味があると答えた人の中で、卒業後1年目から精神科で働いてみたいと思うかについて集計した結果、すべての学年において卒業後1年目から精神科で働いてみたいと思う人が倍増していた。全体でみても卒業後1年目から精神科で働いてみたいと思う人が7.4%から18.5%に増加していた。また、違う角度からみると、卒業後1年目から精神科で働いてみたいと思うと答えた人は、すべての人が精

神看護学に興味があると答えていた。このような結果から、精神科病院での勤務に対しては、精神看護学に対する興味の有無が大きく関与していることがうかがえる。

では、どのようにすれば卒業後1年目から精神科で働いてみたいと思う人が増えるのであろうか。1年生・2年生のうちは、精神科病院に対し、暗い、閉鎖的、隔離されているなどのイメージをもっている学生が多い。3年生・4年生になると、1年生・2年生と同じようなイメージをもってはいるが、明るい、きれいななどのイメージが追加される。これは、実習等で実際の病院に行き、自ら精神科病院を実感しているからである。そのため、1年次の精神看護学概論の授業の中で精神科病院の見学や精神科病院のスライドやDVDの資料等を入れ、早期のうちに精神科病院の実際の姿を知ってもらうことも一つの方法と考える。その際注意しなくてはいけないことは、きれいな病院や新しい病院だけを紹介することのないようにしなければならない。

また、精神看護学に興味・関心がもてるような授業の工夫や実習内容の検討が必要であると思うが、その際も、怖いや暴力的など精神障がい者のマイナスのイメージを払拭することだけに力を注がないように注意しなければならない。仮に、精神科病院や精神障がい者に対するマイナスのイメージがなくなり、精神科病院への就職者が増加したとしても、精神科病院への就職者を増やすことが精神看護学の教育における第一義ではない。それよりも、精神科病院や精神障がい者のプラスの部分もマイナスの部分も伝えながら、もっと言うならば、精神科病院や精神障がい者の正しい理解につながる教育を目指さなければならない。そのためには、当たり前

なことではあるが、精神科病院や精神障がい者のみならず、社会情勢なども踏まえながら“偏らない”授業をすることが肝要であると思われる。そのような授業を進めるなかで、卒業後1年目から精神科で働いてみたいと思ってくれる学生が一人でも増えてくれれば幸いである。

4. 本研究の限界と今後の課題

本研究の対象人数は300名を超えている。しかし、対象者はA大学看護学科の学生だけであるため、結果を一般化するには限界がある。今後は、対象大学の数を増やし研究成果を一般化する必要がある。また、今回は横断的に見てきたが、入学時からコホートを作り、縦断的に見ていくことも必要かもしれない。さらに、調査項目の標準化ができれば、多くの大学で継続して調査・研究することができ、研究成果がより精度の高いものになるとと思われる。

VI. 結論

1. 看護学生が職場選択を決定する時期と理由について

看護学生が職場選択を決定する時期は、大学3・4年生が最も多いことが分かった。選択の優先順位としては、職場の雰囲気や圧倒的に高く、他は先行研究と似た傾向にあった。それは、看護学生が対人関係においてストレスフルな状況にあることを反映している結果ではないかと考える。また、就労先の決定には実習の影響が大きく関与している。

2. 精神科病院で働くことに関して

卒業後1年目から精神科で働いてみたいと思おうかについては、どの学年も「思う」と答えた

学生は10%未満であり、学年間での大きな違いはなかった。卒業後1年目から精神科での就職をためらう理由としては、全体で見ると、患者とのかかわり方が難しい、知識・技術修得の遅延、新卒での不安、恐怖心が上位にきていた。また、精神科病院についてのイメージでは、多くの学生は暗い、閉鎖的、隔離などマイナスのイメージを抱いている。このことも、看護学生が精神科病院で働きたくないと思っている理由の一つになると思われる。

3. 精神看護学に対する興味の有無と就職選択について

精神科病院での勤務に対しては、精神看護学に対する興味の有無が大きく関与していた。看護学生は、精神科病院に対し、暗い、閉鎖的、隔離されているなどのイメージを多くもっている。そのため、早期のうちに精神科病院を見学し、実際の姿を知ってもらうなど、精神看護学に興味・関心をもてるような授業の工夫が必要である。そして、なによりも精神科病院や精神障がい者を正しく理解してもらうために、社会情勢なども踏まえながら“偏らない”授業をすることが肝要である。

謝辞

本研究の趣旨にご理解をいただき、快く協力をしてくださいました学生の皆様に深く感謝申し上げます。

利益相反

この研究に関して、利益相反はない。

【引用・参考文献】

- 1) 生涯学習政策局政策課調査統計企画室. 学校基本調査—平成28年度結果の概要一, 調査結果の概要(高等教育機関). 文部科学省. 2017, 30p.
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2016/12/22/1375035_3.pdf. (参照 2017-01-05).
- 2) 大塚真代, 古米照恵, 藤野文代. 看護大学生の進路選択に影響する情報と支援ニーズ—卒業を間近にした看護学部4年次生への調査—. ヒューマンケア研究学会誌. 2013, 5(1), p.73-77.
- 3) 原 玲子, 竹本由香里. 看護師として病院に就職することを決定した看護学生のキャリア志向と職場選択に関する研究. 宮城大学看護学紀要. 2011, 14(1), p.69-79.
- 4) 福間美紀, 廣野洋子, 長田京子ほか. 看護大学生の進路選択と進路支援のニーズに関する実態. 島根大学医学部紀要. 2011, 34, p.17-24.
- 5) 白鳥さつき. 看護学生の職業社会化に関する研究. 山梨医科大学紀要. 2002, 9, p.25-30.
- 6) 多々納憂子, 平塚知子, 石橋照子ほか. 島根県西部地区出身看護学生の就職先選択要因に関する調査. 島根県立出雲キャンパス紀要. 2013, 8, p.47-56.
- 7) 平間あゆみ, 長江美代子. 看護大学4年生の職業レディネスに関する研究. 日本赤十字豊田看護大学紀要. 2013, 8(1), p.121-133.
- 8) 森 美春, 西山ゆかり, 木戸久美子. 四年制大学の看護学生における職業準備性. 滋賀医科大学看護学ジャーナル. 2005, 3(1), p.55-63.
- 9) 友安英喜, 井上雄二, 井上 誠ほか. 精神科における看護師の人材確保を困難にしている要因と課題—看護大学4年生への就職に関するアンケート調査から見えたこと—. 第20回日本精神科看護学術集会. 2013, p.187-189.
- 10) 松井啓一, 宮本恵子, 三木明子. 精神看護実習を通して学生が感じ取った魅力的要素. 日本看護学会論文集: 看護教育. 2005, 36号, p.257-259.
- 11) Alzayyat, A; Al-Gamal, E. A review of the literature regarding stress among nursing students during their clinical education. *International Nursing Review*. 2014, 61, p.406-415.
- 12) Bartlett, ML; Taylor, H; Nelson, JD. Comparison of Mental Health Characteristics and Stress Between Baccalaureate Nursing Students and Non-Nursing Stu-

- dents. Journal of Nursing Education. 2016, 55(2), p.87-90.
- 13) 田邊要補, 藤田 勇. 看護学生の精神障がい者に対するイメージ形成とその要因. 桐生大学紀要. 2012, 23, p.37-43.
- 14) 小野晴子, 岡本亜紀, 土井英子ほか. 精神看護学実習における学生—患者間の「距離」に関する研究. 新見公立短期大学紀要. 2007, 28, P.7-13.
- 15) 看護基礎教育の充実に関する検討会. 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書. 厚生労働省. 2007, 45p. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf>. (参照 2017-01-10).